

「研修会等名称」

平成 18 年度 文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」選定
ティームティーチングによる二言語同時学習—外国語教育の新たなる教授形態—
場所： 京都外国語大学
期間： 2009 年 3 月 14 日 (土)

1. 研修の内容

本プログラムは 3 年間の研究プログラムとして、平成 18 年度に文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に選定されたものであり、今回は 3 年の教育活動の総決算として報告会が行われた。京都外国語大学で行っている取り組み事例の報告があった後、外国語教育を専門とする研究者 2 名の講演会があった。

京都外国語大学は外国語学部の単科大学であるが、英米語学科・スペイン語学科・フランス語学科・ドイツ語学科・ブラジルポルトガル語学科・中国語学科・イタリア語学科・日本語学科の 8 学科を有している。このようにそれぞれの外国語に精通している教員が多いことから、外国語を専門とする二名の教員が同時に同じ教室でチームを組んで授業を行う本プログラムを構築したとのことである。

この二言語同時学習は、「英語」を機軸としている。授業は「BSL EX」(Bi-language Simultaneous Learning EX) という名称のもと、選択必修科目として設けられており、「BSL EF (英語・フランス語)」「BSL EG (英語・ドイツ語)」「BSL ES (英語・スペイン語)」「BSL EC (英語・中国語)」「BSL EP (英語・ポルトガル語)」「BSL EI (英語・イタリア語)」の 6 科目を設定しているとのことである。

この授業の特色としては、以下の 3 つが挙げられる。

(1) ティームティーチングによる高度な授業内容

専門教員が 2 名いることにより、より高度な内容で二つの言語の比較ができる。また、両言語圏の文化も比較対照して議論するため、異文化に対して多様な観点から理解を深めることができる。

(2) 融合型 CALL の利用

e-learning, インターネット, DVD などのマルチメディアを活用できる CALL (Computer Assisted Language Learning) を用いている。これにより、英語と他言語の運用力が高まる。また、e-learning を取り入れていることにより、学生は自学自習ができる。

(3) ネイティブスピーカーによる授業アシスタント

授業で取り上げられる言語を母語とする、京都外国語大学に留学中の外国人留学生が、TA として授業に出席し、日本人学生の学習支援をする。留学生は「留学生別科」に所属しているため、なかなか日本人学生と触れ合う機会がなかったが、本授業によりコミュニケーションが密になった。また、日本人学生もネイティブの学生と接することにより、当該言語の運用力が高まる。留学生にとっても、日本語を学ぶ機会が増える。

実際にどのような授業を展開しているのか、各担当者から詳しく説明がなされた。その後の講演会では、CALL 教育の専門家 高橋秀夫氏 (千葉大学言語教育センター教授) が CALL 教材の開発と CALL 教材の長所について講演を行い、複数言語教育について各方面で提言を行っている 境 一三氏 (慶應義塾大学経済学部教授・外国語教育研究センター長) が「複数言語を学ぶ必要性」について講演を行った。

2. 研修の成果

本研修では、様々な授業の運営方法が提示された。「二言語同時学習」のもとで提示されている学習法であるが、「英語教育」のみに絞って考えた場合でも効果的と思える学習法がいくつかあり、非常に勉強になった。

「BSL EG (英語・ドイツ語)」の報告では、英語で書かれたドイツ語の基礎的な文法書を読むことにより、英語表現を学ぶと同時に、英語とドイツ語の文法差を学ぶ試みが紹介された。また、ハリーポッターの映画の英語スクリプトをドイツ語に訳す練習を行うといった学習法、また学生がプレゼンテーションを英語バージョンとドイツ語バージョンでそれぞれ行うという試みも紹介された。これら提案された学習法の中で、「基礎的な文法書を英語で読む」というのは、なかなか面白い試みであると思われる。愛知大学の学生に英語の文法を、比較的平易な英語で説明した文章を読ませることにより、「以前 (高等学校などで) 学んだことを、『英語で』理解している」感覚を身につけさせることができ、「英語で学ぶ面白さ」を喚起できるのではないかと考える。同時に、英語の文法力の強化も図ることができる。

「BSL EC (英語・中国語)」では、学生3人がレポーターとなってプレゼンテーションを行う試みが紹介された。日本語で質問された学生が、次に中国語で答え、更その学生が別の学生に英語で質問する...といったように、プレゼンテーションを行っている学生が3言語を操るといったものである。各言語のリスニング力・スピーキング力・解釈および表現力が鍛えられる、非常に面白い学習法だと思われる。もちろん、愛知大学では複数言語を対象にしてこのような試みを行うことはできないが、英語と日本語に絞って、このようなプレゼンテーションを「英語演習」のような授業で行うと、「受身」の英語学習ではなく、「発信」の英語学習ができ、学生の英語力の増強を図ると同時に、学生の英語への興味を喚起できるのではないかとと思われる。

このように京都外国語大学の二言語同時学習ではCALLを導入しているが、プレゼンテーションの資料収集としてCALLを活用したり、DVDなどの音声資料を用いる際のツールとしてCALLを使う場合が多いようである (e-learningソフトもCALLには入っているため、時には使うこともあるようであるが)。これに対して、授業報告の後の講演会で話した高橋秀夫氏の千葉大学では、教員はCALL教材作成に力を注ぎ、授業では学生の自学自習を促し、教員は授業の途中で少し話をする程度であるとのことである。もちろん、教員は授業外で、学生の英語力をアップさせる教材開発に多大な時間を割いているが、授業では学生がコンピュータに向かうだけで学習が進んでいく...というのは、なかなか私には受け入れがたい教授法であった。最近ではCALLを導入している大学も多いようであるが、もし将来的に愛知大学にCALL教育を導入するとしても、京都外国語大学のような、CALLをひとつの手段として用いるようなCALL教育を導入すべきであると考えられる。

3. 授業への研修成果の反映状況

私は担当している授業のうち、必修科目である「論説英文講読」および「TOEIC」では大きな悩みはないが、2008年度に初めて担当した選択科目の「英語演習」(3・4年次生配当)はどのような授業をすればよいか、試行錯誤を繰り返している。本研修で学んだような、学生主体のプレゼンテーションといった「発信型」の授業にするのも面白いかもしれない。私が担当している、外国語を専門としない法学部生・経営学部生にあったやり方に改善する必要性はあるが、今回の研修で得た知見を活かし、学生に英語に興味を持ってもらえるような授業を展開したいと考えている。

学部長	FD委員長	FD委員会	企画・広報課長	係

